

新刊紹介

野沢慎司・菊地真理 著
『ステップファミリー——子どもから見た離婚・再婚』
(KADOKAWA, 2021年)

藤間 公太*

日本国内におけるステップファミリー研究を牽引してきた著者らによる、待望の一冊である。ステップファミリーとは、「親の一方あるいは双方の新しいパートナーとの関係をもつ子どもがいる家族」を指す (p.76)。日本は、親の再婚を経験する子どもの数を把握するための公的統計すらも存在しておらず、総じてステップファミリーに対する関心が低い社会である。当事者への調査にもとづき、ステップファミリーをめぐるさまざまな現実を描き出した本書は、そうした状況に一石を投じるものといえる。

本書の概要は以下の通りである。第1章では、子ども虐待死亡事例をもとに、ステップファミリー当事者や支援者が「普通の家族」を志向することが内包する問題について論じられる。第2章では、離婚や再婚を含めた日本における家族の動向を歴史的に追うとともに、離婚や再婚をめぐる親子の利害が必ずしも一致しないこと、日本における離婚と子どもをめぐる状況は世界標準とは齟齬があることが示される。第3章、第4章では、筆者らが実施したアンケート調査、インタビュー調査にもとづいて議論がなされる。継親が別居している実親（以下、別居親）になりかわり、同居している世帯メンバーのみを「家族」とみなす「代替モデル/スクラップ&ビルド型」を親が志向することによる子どもとの葛藤や衝突と（第3章）、離婚、再婚後も子どもと別居親の関係が継続し、また別居親も子どもの養育に責任をもってかわる「継続モデル/連鎖・拡張するネットワー

ク型」がもつ独自の強みが（第4章）、そこでは示される。最後に第5章では、ステップファミリーが『『普通の家族』というフィクションと決別し、『事実』に基づく家族関係の実現を目指す』（p.176）ために必要な支援や制度のあり方が論じられる。

本書が示唆するのは、離婚・再婚をめぐる「常識」を相対化することの重要性である。その「常識」とは、「親が離婚をしたら両親のどちらかが子どもを引き取って『ひとり親家庭』となり、その『ひとり親』が再婚したら再婚相手が子どもの『新しいお父さん/お母さん』となって『ふたり親』に戻り、『ふつうの家族』のようになるとみなす考え方」のことである (p.43)。この「常識」の問題は2つ指摘できよう。第1に、親が離婚や再婚をした場合でも、子どもにとっては別居しているもう1人の親が存在していることを看過していることである。離婚をしたら「ひとり親」、再婚をしたら「ふたり親」という見方は、別居親の存在や、別居親と子どもの関係性を後景化してしまう。関連して第2に、再婚して「ふたり親」になれば「普通の家族」のようになるという見方は、あまりにも形式的である。伝統的な社会学の言葉を使えば、世帯に「親」が二人いる「構造」であれば、世帯員のニーズ充足という「機能」が果たされるという想定が、この見方には潜んでいる。離婚・再婚に関するこうした「常識」は、ステップファミリー特有の困難や経験、さらには「継続モデル/連鎖・拡張するネットワーク型」がもつ可能性を潜在化させてしまう。

* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部第2室長

離婚・再婚をめぐる「常識」の相対化は、社会保障や社会福祉のあり方を考える上でも重要である。「構造」と「機能」を直ちに結びつけることで当事者のニーズが看過されれば、適切な支援施策は整備されえない。当事者が経験する困難や不利に対応していくためにも、「普通の家族」や「常

識」にとらわれない議論が求められる。本書は、研究者のみならず、政策策定者や支援提供者も含め、多くの人に読まれるべきものである。

(とうま・こうた)